



阪神・淡路大震災時の学生ボランティア活動

地域に根ざし 人に学ぶ共生的人間力

— 震災の記憶の伝承と組織的体制の構築による学生活動支援 —



神戸大学

- 都市安全研究センター
- 学務部



能登半島地震での学生ボランティア活動

1

共生的人間力の原点：阪神・淡路大震災

1995年1月17日・・・



将棋倒しになった図書館の書架



避難所となった体育館



グラウンドに並ぶ陸上自衛隊テント



学生44人・教職員4人の犠牲者

2

学生が地域住民とともに震災救援活動を展開



救援物資の仕分け・運搬



被災留学生子女を対象にした寺子屋

被災地(=地域)に根ざし、人に学ぶ



学生の共生的人間力の向上

■ 学生による日常の社会貢献の取組

総合ボランティアセンター(80人)

児童館でのボランティア活動・地域で生活する障害者の介助・手話や点訳の学習会・自治会の地域活動支援など



児童館での活動

学生震災救援隊(33人)

復興公営住宅での茶話会・学童保育所でのボランティア活動・野宿者の訪問活動など。2007年「21世紀のまちづくり賞」(兵庫県地域生活研究機構)を受賞



復興住宅での茶話会

灘チャレンジ(50人)

地元のボランティア団体など30団体以上が参加する地域交流のお祭り「灘チャレンジ」を毎年開催。来客数約1万人。



灘チャレンジでの震災展示

留学生支援のバザー

TRUSS(64人)

留学生と日本人学生の交流、および留学生とその家族の生活支援(役所の手続きや健康診断などのサポート)。



■ 「震災」にこだわった本学学生の活動

- 「ボランティア元年」と呼ばれた1995年の阪神・淡路大震災以来、「震災」にこだわった、本学学生による様々な活動が活発に展開される。
- いわゆる「ボランティア活動」以外にも、学生メディアによる震災の記憶の風化を押し止める活動など、様々な形態の活動が行われている。

事例1) ニュースネット委員会による 「震災」の継承活動

- 1995年に阪神・淡路大震災の取材活動を行うために発足した学生団体
- 学生や大学に関係する社会・文化・スポーツなどの情報を取材し発信する学生メディア
- <http://home.kobe-u.com/top/newsnet/>





亡くなった学生のご遺族への取材活動(2000年1月17日の紙面)

震災の翌年、1996年に亡くなった学生のご遺族から手記を寄せてもらう活動をつづけ、現在に至るまでも、ご遺族からの聞き取りや取材活動を継続している。



震災特集の取材について話し合う神戸大生ら＝灘区六甲台町

今年は、震災で三十九人が亡くなった神戸大の学生を中心に取材班を立ち上げ、十大学の六百十人にアンケートを実施。「震災について家族や友人と話すことはあるか」との問いでは、「よく」「ときどき」など「話す」と答えた割合が、兵庫県在住者は48%だったのに対し、京都府在住者は20%で、地域差が明らかになった。

特集では、神戸大が留学生に震災のことを伝えている取り組みや、被災地支援の学生団体の活動も紹介している。

被災経験のない神戸大二年の八幡一平さん(20)＝太子町＝は「大学に入るまで、震災は遠いものだった。取材を通じ、震災という事実ではなく、記憶を伝えたいと思うようになった」。神戸大学ニュースネット委員会の編集長で、二年の大野将寛さん(21)は東京都出身。「震災を知らない自分だからこそ聞ける話や、伝えられることもあるのでは。被災地の大学として発信し続けたい」と語った。(宮本万里子)

原点である「震災」にこだわる特集(神戸新聞2007年1月23日)

被災体験のない学生が取材を通して「震災という事実ではなく、記憶を伝えたいと思うようになった」「被災地の大学として発信し続けたい」と思うようになる

事例2)「灘チャレンジ」での 「灘のあしあと」企画

- 阪神・淡路大震災の直後、避難所となっていた大学で救援活動を行うために発足した「神戸大学学生震災救援隊」が、1995年6月に実施したお祭り
- 当初は「復興祭」として、学生と地域住民が復興に向けて「灘のまちづくりにチャレンジ」という意味で始まった。
- それ以降、毎年6月第1日曜日に実施され、今日に至る。地域のボランティア団体など30団体が出店し、来場者は約1万名。

現在は「地域とつくる祭り」ということを大切にしながら、学生や地域で活動しているボランティア団体が自分たちの抱える問題を発信する場、また、そういった団体やまちの人が交流する場といった役割が強くなっています。



多くの人が参加する地元委員会。
いろんな意見が直接聞けます。

灘チャレンジ2008では

「つながりを豊かに」をテーマに、今までにできたつながりや新しいつながりを大切にして祭りを開催しました。

学生の想いの発信として、「夜間中学」や識字の問題を取り上げた風刺劇や、地元の作業所のコンサートを行ったステージ、野宿者問題や防災クイズを扱った子ども向けのミニゲーム、ボランティア団体の出店する模擬店など、多くの企画を実施しました。



前日のパレードでは、子どもたちと手作りのみこしを担いで歩きます。



「夜間中学」を取り上げた風刺劇。
熱演する役者もみんな学生です！



野宿者について学べるゲームを実施。
子どもも興味津々です。



当日の会場はたくさんの人で大賑わいです！



パネル展示企画「灘のあしあと」(2008年6月1日)

2007年から灘チャレンジが始まった「灘のあしあと」企画。学生が震災当時に被災した人の話を聞き、当時の写真とあわせて展示し、震災を知らないまちの新たな世代に記憶をつなぐ。パンフレットにも記事を掲載している。



灘チャレンジで実施した能登半島地震の展示(2007年)

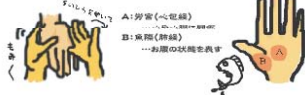
灘チャレンジでは、阪神・淡路大震災のことだけでなく、他の自然災害被災地についても、展示や募金などの活動を行う。震災や他の災害の記憶を、世代と地域を越えて「つないでいく」活動を行っている。

事例3) 中越・KOBE足湯隊

- 学生震災救援隊は、1998年の北関東水害、2000年の鳥取県西部地震、2004年の中越地震などで、泥だし・炊き出しなどの救援活動を実施。
- 2007年3月25日発災の能登半島地震の際に、被災地NGO協働センターの村井雅清氏に勧められて「足湯」活動を被災地で行うことに。
- 従来の救援活動に比べて、はるかに息の長い活動に発展。

秘伝 足湯のやり方

- ◆笑顔であいさつする。
- ◆コップ一杯のお水を飲んでもらう。
- ◆くるぶしが浸かる程度のお湯をはる。
(お湯に生姜や粗塩などをいれると保温効果が高まる)
- ◆足を浸けてもらう。
(ぬるめに設定し、さし湯をして温度を調整する)
- ◆指を一本一本もむ。
(陰陽に則って昼は左手から、夜は右手から)
- ◆水かきをつまむようにもむ。
- ◆手のひら全体をもみほぐす。
相手の親指と小指の間に自分の小指を入れ、手をそらせる。
そのまゝAを押し、つづいてBを押し。



- ◆手の甲を上にして、人差し指と親指のつけ根を押す。
- ◆手の人差し指と親指の側や、小指側をさする。
- ◆前腕(手首からひじにかけて)の内側と外側をさする。
- ◆上腕(ひじから肩にかけて)の外側をさする。
- ◆片手が終わったら、さし湯をしてお湯の温度を調整する。
- ◆両手が終わったら、足を軽く洗ってタオルでふく。

- 準備するもの
- ・水(飲用水)、コップ
 - ・お湯、水(さし水用)
 - ・あれば粗塩、生姜、入浴剤など
 - ・カス(ボンベ、コンロ)
 - ・だらい、バケツ、ひしゃく
 - ・タオル
 - ・ブルーシート、椅子



被災地での足湯ボランティア

そもそも「足湯ボランティア」は阪神・淡路大震災の際に生み出されたもので、2004年の中越地震の時に災害ボランティアのツールとして広まった。現在では各地の社会福祉協議会で、災害ボランティア講習会のメニューとして採用されるなど、更なる拡大を見せている。

「足湯」を通して学生は、被災した人の生活や健康に関する「つばやき」を聞き、震災の被害を追体験することになる。

●「子どもはいつも仮設の部屋には居ない。ストレスとかあるんだろう。狭いし、私でも一日中居ると気が変になる。」

(中越沖地震被災地/女性/2008年07月19日)

●「仮設のお風呂は深すぎて入る気にならない」
(能登半島地震被災地/女性/2007年12月)

●「焼き魚（さんま）が好きだが、仮設の中で焼くと火災報知機が鳴るので、焼けない。」

(中越沖地震被災地/女性/2007年09月22日)



■能登半島地震被災地での足湯



■能登半島地震の被災地、穴水町大町仮設住宅談話室で、学生が被災した人の話を聞く。

2007年3月より

能登半島地震被災地へ **13回**

新潟県中越沖地震被災地へ **6回**

岩手宮城内陸地震被災地へ **2回**

被災地へ実際足を運び、足湯の活動や足湯講習会を行いました!!

約400人（述べ）が足湯の活動に参加し、700人以上の人が足湯を受けられました。

復興に力癒やしの足湯

能登半島地震

ボランティア注目集まる

神戸、新潟の被災地の悩み蓄積

高知大学の学生をマッサージする足湯隊の学生ら
→5月6日、石川南輪船門前町民会

足湯隊能登へ中越へ

神大生ら被災癒やす

本音聞き「体験共有」

■(左)神戸新聞 2007年6月21日

■(右)朝日新聞夕刊 2008年1月9日

足湯に関する新聞記事

- 私は震災を経験していません。それでも「神戸に住んでいる」ということを言うと、「あのときは大変やったんやろねえ」と言われます。そういうとき、被災者の方は共感を求めているんじゃないかと思います。「こういうのは経験せな分からんからねえ」と、よく言われます。私は今の神戸の様子を言って、被災者の方にうなづくことしかできません。でも、なんとなく、そこには自信があります。足湯を通して、手と手のあたたかさを共有／分け合えることができるから、きっと大丈夫、気持ちも共有できるはずという自信です。

(文学部2年生[2007年当時]・安原希さんの感想)

■ 大学の震災教育と課外活動支援

正課領域

総合教養科目「阪神・淡路大震災」

前期	後期
住宅被害	防災・減災の国際活動
人的被害	災害情報システム
理学的な視点から震災	災害救急医療とDMAT
地盤	災害弱者への救援
ライフライン、交通網	心のケア、PTSD...
産業被害	社会基盤と住宅の耐震強化
救助と消火	災害医療と公衆衛生
避難経路と避難所	経済学的視点から見た阪神淡路大震災
災害報道	文化活動を通じた安心
ボランティア	地域づくり
被災者支援と法・行政	災害資料の保存と歴史
復興都市計画の展開	資産を活用した文化形成
減災とは	

- 震災翌年より現在に至るまで開講
(内容は2007年度のもの)

正課外領域

神戸大学ボランティア講座

実施年	テーマ	参加人数
1998	ボランティアの理論と実習	53人
1999	ボランティアの理論と実習	45人
1999	ボランティアとは？他	50人
2000	ボランティアとは？他	40人
2001	学校におけるボランティア活動の導入等について他	43人
2003	ボランティアの社会的意味他	66人
2004	「生き難さ」ってなんだろう・・・？	107人
2005	震災10年、社会のひずみは埋まったか	59人
2006	まちづくり	42人
2007	ボランティアから見えてくる生き方	42人
2008	社会的排除と市民活動	75人

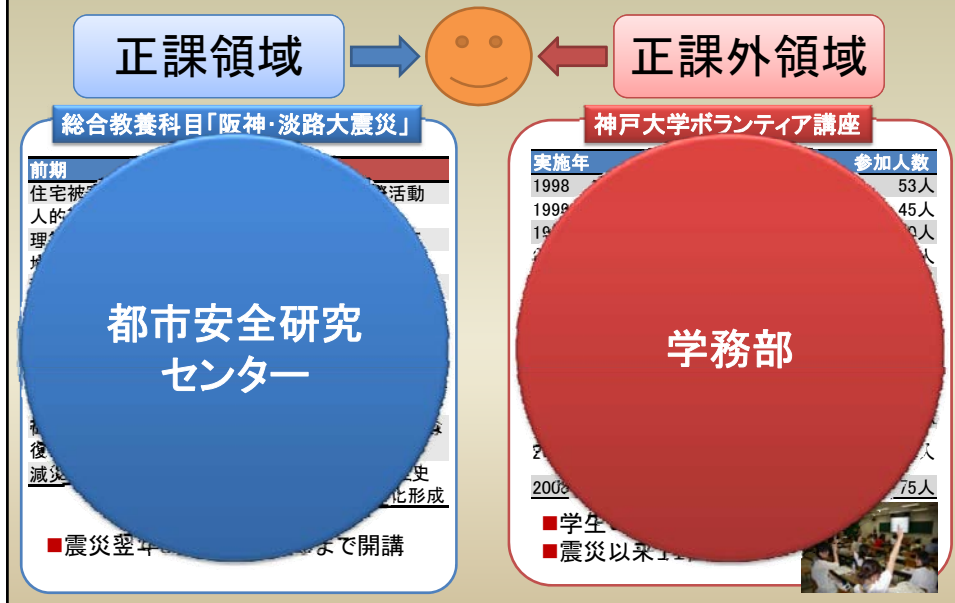
- 学生も運営に参画
- 震災以来11回開催



体系的

実績

■ 震災と学生支援



■ 都市安全研究センター

- 阪神・淡路大震災の翌年1996年に設立
- 防災の研究教育のための学内共同施設
- 体系的かつ継続的な **震災教育**



震災教育

現代GP「震災教育システムの開発と普及」

- 災害文化を伝え・創る学生の集い
2007年度に8回実施

学生のニーズ・要望

震災教育における学生ボランティア活動の重要性

学生および社会のニーズに応える

■ 現代GPから生まれた学生支援

- 2007年1月26日 現代GP「震災教育システムの開発と普及」の一環として、震災教育のユーザーとなる学生の意見を聴取するために＜災害文化を伝え・創る学生の集い＞を開催。総合ボランティアセンター・学生震災救援隊・ニュースネット委員会・防災ユースフォーラムの4団体から学生が参加。以降、2008年1月までに8回開催。
- 2007年9月16～17日 神戸大学で「第6回防災ユースフォーラム」を開催。関西と関東の防災・災害救援に取り組む学生同士の交流を図る。フォーラム最後の学生によるパネルディスカッションで、神戸大学については、**学生のボランティア活動支援のための専門職員を擁した窓口の必要性**が指摘された。

37 第1956号 (第三種郵便物認可) 文 教 ニ ュ ース 平成19年10月29日 (月曜日)

◆神戸大学◆
＝キャリアカフェ「理系のあなたの素敵な生き方」＝



神戸大学で「第6回防災ユースフォーラム」

現在、いたるまで取り上げられてきた。震災教育のユーザーとなる学生の意見を聴取するために、総合ボランティアセンター・学生震災救援隊・ニュースネット委員会・防災ユースフォーラムの4団体から学生が参加。以降、2008年1月までに8回開催。

2007年9月16～17日 神戸大学で「第6回防災ユースフォーラム」を開催。関西と関東の防災・災害救援に取り組む学生同士の交流を図る。フォーラム最後の学生によるパネルディスカッションで、神戸大学については、**学生のボランティア活動支援のための専門職員を擁した窓口の必要性**が指摘された。

2007年9月に実施した、防災ユースフォーラムが、文教ニュースに取り上げられた。「防災」に取り組む関東・東海地方の学生と、「震災救援」に取り組む関西の学生の交流の場となった。

■ 学長との懇談から、学生支援GP申請へ

- 2008年3月19日 防災ユースフォーラムの結果などを大学側に伝えるため＜災害文化を伝え・創る学生の集い＞の学生団体有志で野上学長に懇談を求め、「地域や学生からのボランティア活動希望などを受け付け、学生団体に適切につなぐことのできる、大学としての公式の窓口（他大学にあるボランティア支援室など）」を要望。
- 2008年4月20日 都市安全研究センターより、2008年度の文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援GP）」に申請。申請プログラム名は「地域に根ざし人に学ぶ共生的人間力」。
- 2008年7月7日 学生支援GP採択。申請230件の内、採択は23件。

共生的人間力とは？

近年、「ニート」「フリーター」などが社会的課題として取り上げられています。神戸大の学生も、卒業後は正社員として雇用されなければ生活は厳しく、正社員となっても、激しい競争にさらされます。そのために学中から、いわゆる「勝ち組」となるために時間を費やさざるを得ない学生が増えています。しかし今日、学生が社会から求められているのは、そのような状況を真摯に問い直し、より良い社会を自由に構想し、協同で実現する力「共生的人間力」です。本事業では、神戸大の学生自身による共生・減災に資する活動を支援することで、大学のモットー「真摯・自由・協同」に基づく「共生的人間力」を養うことを目的としています。



中越・KOBET足湯隊として、能登半島地震の被災者に対する足湯活動に取り組む学生

真摯な共感力

幅広い世代の、多様な社会的背景を持つ他者の立場について、先入観なしに共感し、理解する能力

自由な創造力

限界の見えている、既存の枠組みや評価軸そのものを超えて、新たな手法や、価値観を創造する能力

多様な人々との協同力

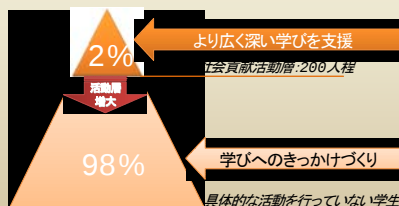
他者との社会的な立場・役割の違い、文化的な違いを理解しつつ、力を合わせることでできる能力

共生的人間力

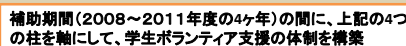


ボランティア講座の実習（高齢者分野）で、神戸市長田区の高齢者との交流する学生

神戸大学では、阪神・淡路大震災の前後より、社会的課題に対して積極的に取り組む学生団体が増加してきました。しかし、そのような活動に取り組む学生は、学内では未だ少数とも言えます。そこで本プロジェクトでは、これらの活動に取り組む学生に対する支援を通じ、学内全体に社会活動に取り組む気運を高め、共生的人間力を備えた学生層の拡大を図ります。



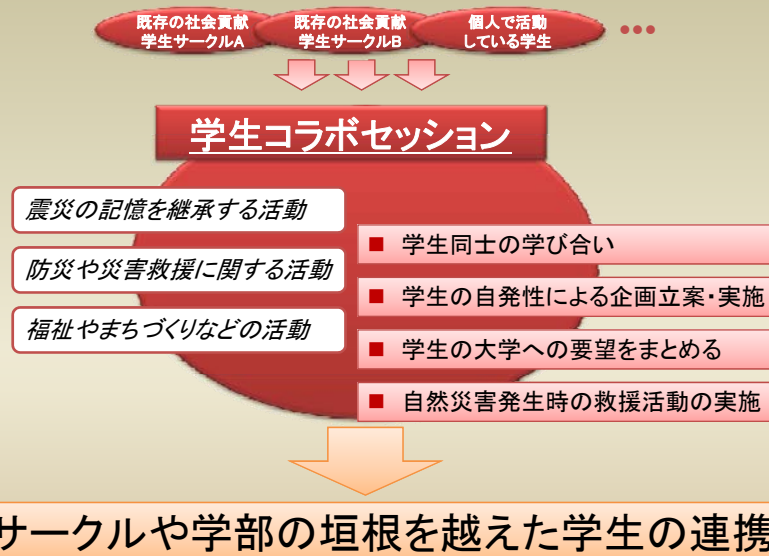
■1 学外の「人に学ぶ」、その「人」の組織化	共生・減災応援団
■2 既に活動している学生の交流・連携の推進	学生コラボセッション
■3 学生社会貢献活動の常設サポート組織	学生ボランティア支援室
■4 地域に根差し人に学ぶプログラムの開発	震災語り場・実践塾



■ 1 学外の「人に学ぶ」、その「人」の組織化



■ 2 既に活動している学生の交流・連携の推進



■ 3 地域に根差し人に学ぶプログラムの開発

学生コラボセッション 共生・減災応援団

企画

協力

震災語り場

- 1回1日で年6回程実施
- 定員10～30名程度参加
- 主に神戸市内で実施
- 震災時の話を聞くのが主。時にフィールドワークも組み合わせる
- コラボセッションに集う学生向け

地域に根ざし人に学ぶ実践塾

- 1回3日～1週間で年2回実施
- 定員50～100名
- 神戸の他、能登・中越でも実施
- 現場でのフィールドワーク体験とその後のワークショップで構成
- 98%の学生への働きかけ

■ 「実践塾」と「震災語り場」

- 一般的な大学ボランティアセンターとしてのボランティア・コーディネートに加え、「震災」「災害」を題材とした人間形成に重点を置く
- 学生の取組の中にある、震災への関心という「芽」をどのように育て、広げていくかが課題
- そのため「地域に根ざし人に学ぶ実践塾」と「震災語り場」というプログラムを実施
- 2008年度は語り場を2回、実践塾を1回実施

震災語り場・実践塾での学びのテーマ(例)

● 神戸・阪神間での学び

- ・復興公営住宅での高齢者との茶話会
- ・神戸市内復興まちづくり学習
- ・震災時の障害者支援を聴く
- ・在日外国人の被災経験を聴く
- ・震災と子どものケア学習



神戸市長田区でのまちづくり学習

● 中越・能登・中越沖での学び

- ・被災者への足湯の実施
- ・雪かき道場
- ・山古志里山体験
- ・刈羽村での震災とこどものころ



能登の穴水町大町仮設住宅にて
震災時の話をうかがう

31

学びの内容

● 地域の生活者の視点で災害を学ぶ

例: 住宅の重要性・地域の生活の実際

● 日常の助け合いの重要性を学ぶ

例: 近隣救助・日常活動の重要性

● 日常的に地域に存在する問題が災害で見える

例: 在日外国人問題・高齢化・過疎化

● 地域を超えた助け合いの重要性

例: 他の被災地との連携・問題が自分たちと「つながっている」感覚



震災を題材に日常の生活や地域を深く知る

課題を他人事としない「真摯な共感力」が重要

■ 本年度実施した「実践塾」

- 中越地震(2004年)・中越沖地震(2007年)被災地における「復興と被災者の生活再建」がテーマ
- 定員15名(応募11名・参加10名)
- 4泊5日(2月23日～27日)で実施



33

- 2月23日(月) 10時～ 移動
- 2月24日(火) 9時～ 復興支援ネットワーク「れんと」で実習
実習内容:被災地である新潟県柏崎市に出来たネットワーク内の障害者作業所等で数チームに別れて実習
実習場所:新潟県柏崎市
- 2月25日(水) 10時～ 柏崎市宮川地区での実習
実習内容:中越地震と中越沖地震で被害を受けた、柏崎市宮川地区で、被災当時の様子を住民から聞き、その後に足湯ボランティアを行います。
実習場所:新潟県柏崎市宮川地区自治会
- 2月26日(木) 9時～ 山古志村フィールドワーク
実習内容:山古志村内の様子を解説してもらいながら見学し、復興の様子を学びます。その後、山古志村の住民の方に先生になってもらい、雪かき・雪下ろしの実習をします。
- 2月27日(金) 10時～ 移動

34

35

- ・「共生的人間力」の3つの力のうち、基本となり、もっとも重要なのは「**真摯な共感力**」
- ・「震災において体験した『人間としての在り方・生き方』の根本に関わる教訓」を伝えるためには、**現場で苦悩する人間と向き合う実践教育**が必要
- ・「**単位のため**」「**卒業のため**」の履修になりがちな正課教育の外で、**学生の自発的な意志**による課外活動への支援であるからこそできる
- ・学生の自発的な活動から提起された問題を、**大学と社会がどう受け止め、生かすか**が大きな課題